

電子出版覚え書き

——『ルル』のことなど

飯野 守

1 『新潮文庫の100冊』と百科事典と

電子出版は、デジタル化されたデータをデジタル化されたデータのままパッケージして販売する出版方法で、読者はパソコンのような読み取り装置でそのデータを読み取って、内容を楽しむのです。音楽用CDと同じ、12センチのCD-ROMによる出版が代表的なものです。すでに多数の作品が出版されていますが、話題になったものをいくつか見てみましょう。

アメリカのポイジャーという出版社が90年代初めに開発した、エキスパンド・ブック(expanded book)というソフト(オーサリング・ソフト)があります。これは、コンピ

ュータの画面上に本の印刷面とそっくりの画面を映し、これを読むことができる仕組みで、日本でこのエキスパンド・ブックの体裁で作られたのが、CD-ROM版『新潮文庫の100冊』(96年)でした。画面を立ち上げてみると、各作品ごとの表紙を経て本文に入ることができ、本文もページだてがされていて、めくるときには音もするという、「本」志向のもので、今では、『明治の文豪』など、同様の体裁のものが本屋さんにも数種類並んでいますね。

また、共に97年に発売された『マイベディア』(日立デジタル平凡社)と『エンカルタ』(マイクロソフト社)は、いずれも97年版が10万部を超えるほど売れるというヒットとな

りました。前者は、百科事典の長い経験を持つ平凡社と日立製作所が新会社を設立して開発したもので、紙版の『マイベディア』をベイスにした、項目数6万を超える小項目の百科事典です。98年には、平凡社の資産ともいべき『世界大百科事典』をデジタル化したCD-ROM版『世界大百科事典』も発売されました。

後者の『エンカルタ』は、アメリカの有名なマイクロソフト社のもので、アメリカ版は93年から発売されており、主に中高生に利用されていました。日本版は、項目数2万に満たない中項目の百科事典ですが、高度な圧縮技術により、CD-ROM8枚分の情報量が1枚に圧縮されているといわれ、値段が手

頃な上に、音声、静止画、動画が豊富で、サービス精神に満ちていることから、ヒット作となりました。98年版からはCD-ROM2枚組となり、内容が充実するとともにウェブサイトにへのリンクも張られて、検索した項目から気軽に関連するサイトに入ることができるようほか、インターネットを通じて各項目ごとの最新情報をダウンロードできる機能もついています。『エンカルタ』は、まさにマルチメディア志向の作品といえます。

2 『ルル』のこと

ロマン・ビクトール・ブジュベの『ルル』（98年・三修社）は、原語版が95年に発売されて以来、日本での発売が待たれていたCD-ROM作品です。この作品は、『ルルの本』（LE LIVRE de LULU）という原題が示すように、まさに本そのものの体裁を維持しており、本文の部分は見開きの2ページで、ここに文章と銅版画風の美しい挿絵が配置されています。

主人公は、本の世界に住むいつも一人きりの10才のお姫さま（ルル）で、彼女がある日空から落ちてきた円盤から出てきた金属製の生き物（ネモ）と出会い、ネモと一緒に様々

な冒険をするというストーリーです。非常に美しく仕上がった作品ですが、『ルル』が目されたのは、そこにCD-ROMらしい仕掛けが散りばめられ、夢のある作品に仕上がっているためです。マウスの操作により、朗読を聞くことができるのはもちろんのこと、挿絵の中に様々な仕掛けがあり、主人公が踊りを踊ったり、本から飛び出した円盤が何ページも先の砂漠まで飛んで行って、砂に埋もれてしまったりというような、アクションを楽しむことができます。

電子出版というと、前述の百科事典のような、CD-ROMの大容量と検索機能を生かされた、どちらかというとな機械的な作品が目玉ですが、『ルル』のような遊びの要素のある作品も面白いものです。紹介の余裕がありませんが、クワイエタ・パッオスカの『まよなかのおしほい』（98年・NHKエデュケーション）も、ペーパークラフト的なアクションが楽しめる作品です。

3 将来へ

このようにCD-ROMによる作品が次々に出されていますが、読者の立場からは、それらを読む（読み出す）ために、どうしても

パソコン（CDの読み出し装置と本体とディスプレイ）が必要ですし、画面を立ち上げるのも面倒なものです。

電子ブック（8センチCD）用には、携帯可能な専用の読み出し装置が市販されています。しかし、これは画面も小さくモノクロで、それほど普及していないのが実状です。画面が単行本並みに大きくて美しく、できればカラーで軽量な、携帯に適した読み出し装置はできないのでしょうか。また、CD-ROMというパッケージに収めなくても、いつでも好きな作品をダウンロードできるようにシステムも良いのではないのでしょうか。

コンビニでダウンロードした小説や雑誌を、公園で寝転びながら専用端末で読む。実は、99年5月からこれに近い構想によるシステムの予備の実験（ただし、モノクロです）が始まるといわれていますが、詳しい話は別の機会に譲ることにしましょう。

《参考書》

この文章を書くにあたっては、季刊『本とコンピュータ』（97年春創刊・トランススアール）の各号を参考にしました。電子出版に興味がある人はぜひ読んでみて下さい。